

言語文化教日本語教育討論会育研究学会

月例会特別企画

To teach, or not to teach, that is the question

2018.1.21

日本語教師の専門性としての
学びへの感受性は育成できるのか

古川嘉子

(国際交流基金日本語国際センター)

「教える」とは

- 教師教育を通じて出会う「すごい」教師
- それらに共通する点：
学習者をよく見ている 学習者に感応している
- 学習者への学習プロセスにビビッドに反応して意思決定
アプローチを変えたり、目標や中身を調整する柔軟性
- 学習者に日本語を学ぶ意味・価値を作りだす

「百年泥」 石井遊佳

職業的感受性

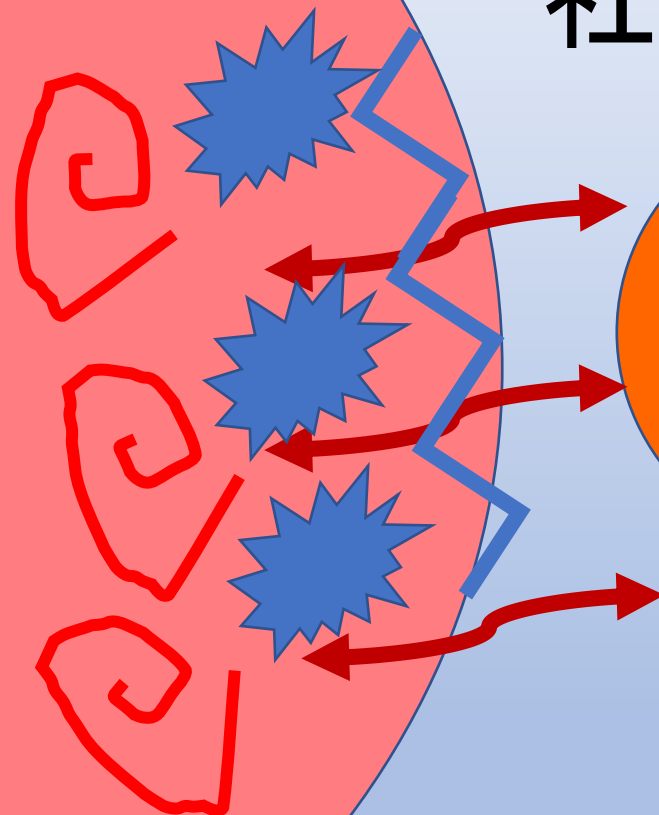
教師の職業理念

教師の
職業的自己像

教育理念・思想
社会認識

学習者
存在
行為
学び

物理的
環境



職業的感受性

- 医学 倫理的感受性

照沼（2016）「チーム医療における倫理的感受性とは」

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsrchr/26/1/26_1/_pdf

- Professional sensitivity

⇒ police

職業的感受性

教師の職業理念

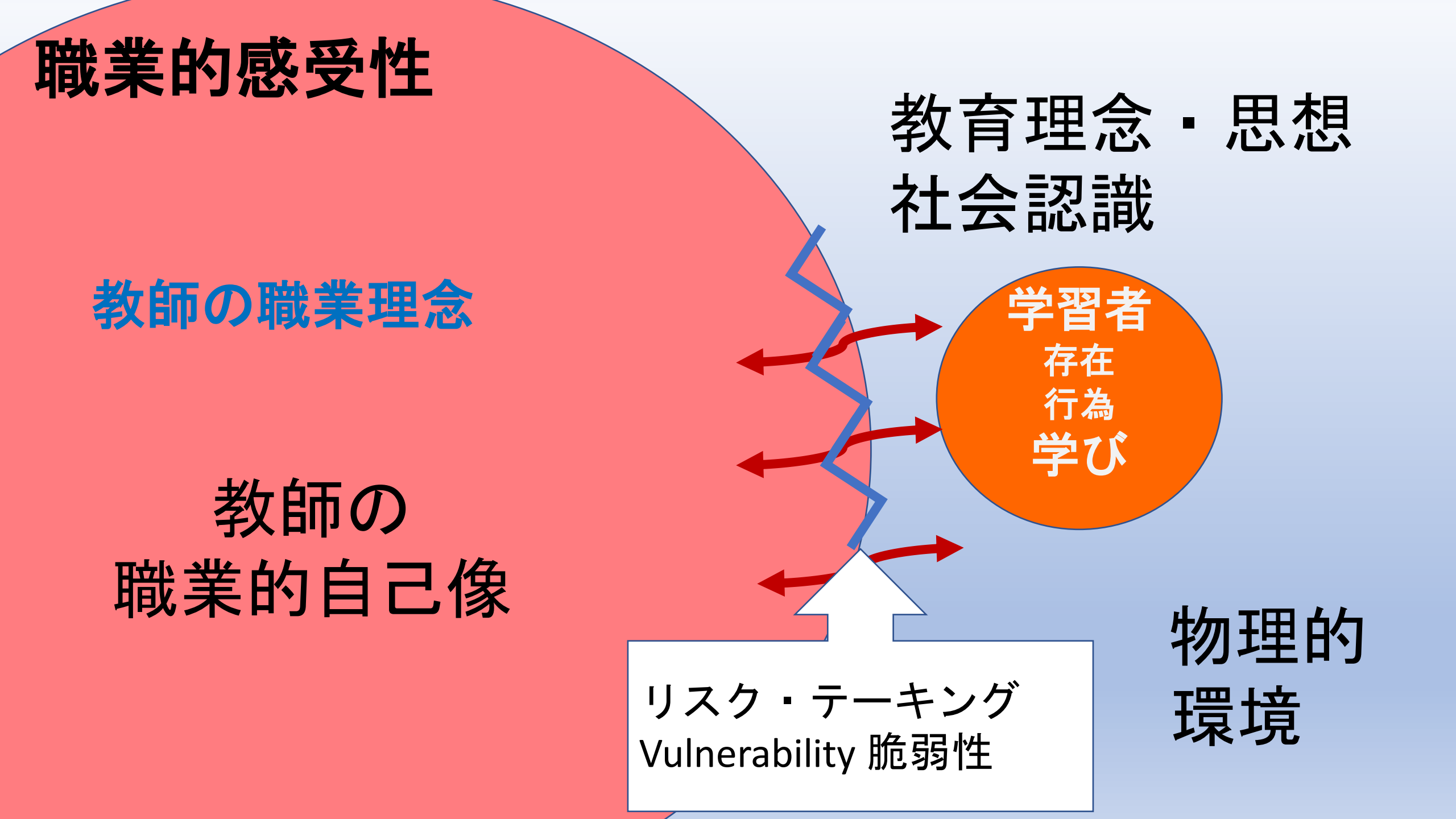
教師の
職業的自己像

教育理念・思想
社会認識

学習者
存在
行為
学び

物理的
環境

リスク・テッキング
Vulnerability 脆弱性



「教える」とは

- 「文法」 v s 「Can-do」論

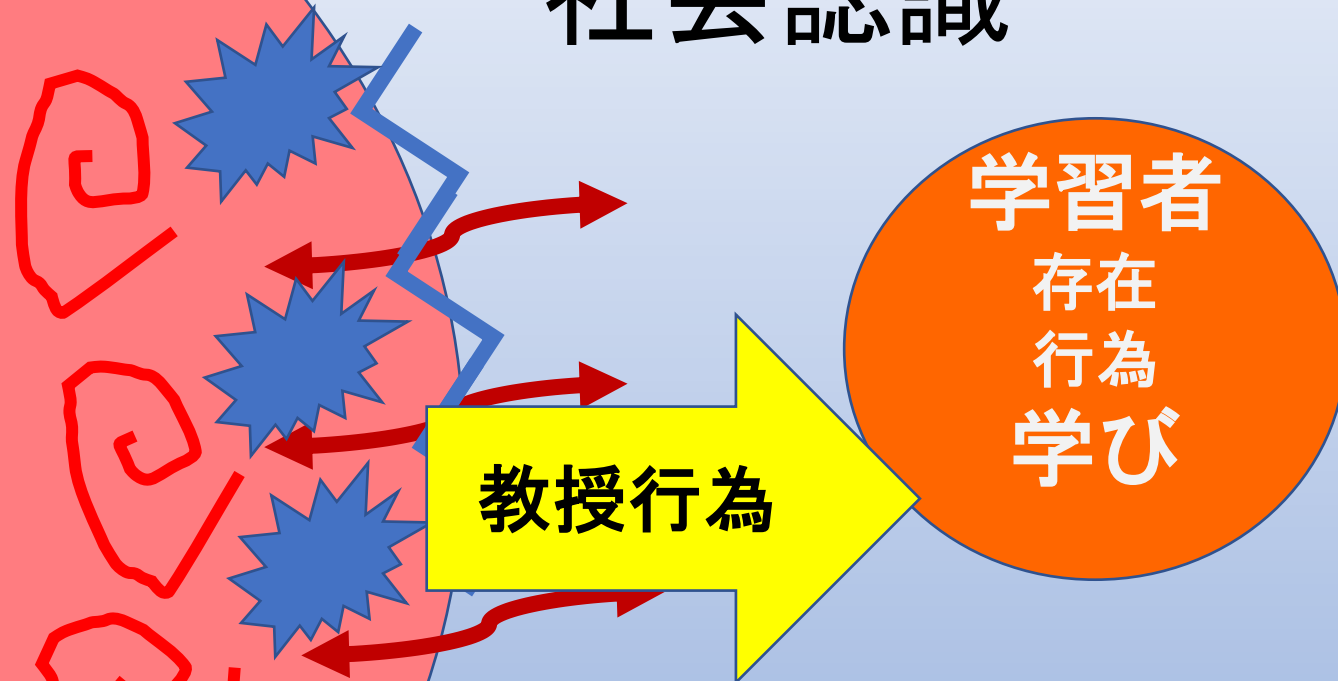
もっと教師は自由なんじゃないのか

職業的感受性

教師の職業理念

教師の
職業的自己像

教育理念・思想
社会認識



学習者
存在
行為
学び

物理的
環境

職業的感受性と教授に関する 意思決定

教育理念・思想
社会認識

教師の職業理念
職業的知識
経験



意思決定

教授行為

学習者
存在
行為
学び

外部リソース

物理的
環境

教師の職業的自己像

学びへの感受性と目標設定

- Graves(1996)
- ニーズ分析 学習者のニーズは？どのように探ったらよいか？
- ゴール・目標設定 コースでの目標と求められる成果（アウトカム）は？
- コース内容の概念化 何が基本理念か？シラバスに何を入れるか？
- 教材や活動の選択と開発 内容と活動をどう調整する？どのようにシステム化する？
- 評価 学習者の学習をどう測定する？コースの有効性をどう測定する？
- リソースと制約への考慮 コースのおかれた状況は？

教授の意思決定・実践のためのツール

- CEFR Companion Volume with new descriptors
- 生活者としての外国人に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案
- JF日本語教育スタンダード
- 21世紀型スキル
- 学習指導要領「生きる力」（平成29年3月公示）
- 各国カリキュラム
- 教材 教科書

完全なシラバス表

Graves (1996)

<p>学習参加プロセス 例：課題設定、経験学習の技法</p>	<p>学習ストラテジー 例：自己モニター、課題特定、ノートテキング</p>	<p>内容 例：専門科目の内容（アカデミック、技術）</p>	
<p>文化 例：文化への気づき、文化的行動、文化知識</p>	<p>タスク・活動 例：インフォメーション・ギャップ、プロジェクト、スキル・トピックに基づく活動（スピーチ、発表）</p>	<p>コンピテンス（能力） 例：仕事への応用（アパートを借りる）</p>	
<p>聞くスキル 例：主要な内容の聴解、特定の情報の聴解、トピックの推測、適切な応答</p>	<p>話すスキル 例：ターンテキング、誤った理解の補償、接続方法の適切な使用</p>	<p>読むスキル 例：特定情報の読み取り、主要な内容の読解、修辭的技法の理解</p>	<p>書くスキル 例：適切な文体・修辭的技法の使用、適切な接続技法の使用、文章構成</p>
<p>言語機能 例：謝罪、不賛同、説得</p>	<p>概念・話題 例：時間、量、健康、個人の特性</p>	<p>コミュニケーション場面 例：レストランで注文する、郵便局で切手を買う</p>	
<p>文法 例：統語（テンス、代名詞）、文型（質問文）</p>	<p>発音 例：文節（音素・音節）、超文節（ストレス、リズム、イントネーション）</p>	<p>語彙 例：語構成（接尾辞・接頭辞）、コロケーション、レキシカルセット</p>	

感受から意思決定へ： 目標設定と教授行動

- 目標 内容・学習活動 評価
- コースの観点からの目標設定
学習者や状況のニーズに配慮し、目標を矮小化させないしくみ
Backward Design 目標の構造化 Big Idea (Wiggins and
McTighe, 2006)
- 授業プロセスの観点から その場での授業暫定的な目標（落としどころ）
の設定
- 評価 目標の達成 目標・内容の妥当性

職業的感受性は育成できるのか

- できる？

- ⇒ 感受から意思決定、教育実践案の策定、実施、評価

- ⇒ 理念との対話 → 弱みをさらすことの意味

- ⇒ カリキュラム評価の視点（田中 2009）

 - 学習・教授の足跡の振り返り

みなさん！パブリックコメント
出しましょう。

「日本語教育人材の養成・研修の在り方につ
いて（報告案）」

文化審議会国語分科会日本語教育小委員会

1月26日まで！

参考文献

- 石井英真（2014）「教員養成の高度化と教師の専門職像の再検討」『日本教師教育学会年報 第23号』 pp.20-29
- 砂川裕一（1998）「「日本事情論」の視界の拡充のために」『広島大学留学生教育第3号』（対話的協働性
- 田中統治（2009）『カリキュラム評価入門』勁草書房
- 古川嘉子（2018予定）「日本語教育におけるコースデザイン論の展開と その課題」『国際交流基金日本語教育紀要第14号』
- Council of Europe(2017) Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment Companion Volume with New Descriptors. Provisional Edition.
- Graves, K. (1996). A Framework of Course Development Processes. *Teachers as Course Developers*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Wiggins, G. and McTighe, J. (2006). *Understanding by Design, 2nd Edition*. Alexandria VA : ASCD.

おまけ：システムの見方の限界

- ・ 教師の包括的な視点で教育実践全体が把握できる
 - ・ しかし、
 - ①それが妥当かどうかの判断ができるわけではない
 - ②必ずしも妥当な問題把握ができるわけではない
 - ・ 技術論的な教授法リソースの飽和
 - ・ **もっと教師は人間的でありたいし、あるべきなのは**
- 内省を進め、教育上の妥当な意思決定をしていくためには何が必要か

おまけ： なぜ感受性か 感情面も含む 感受「力」ではない

- 教育実践は学習者と教師のアクチュアルな対話プロセス そこでの教師の意思決定が実践を生み出す。
- プログラムデザイン時の対話 ニーズ分析⇒目標・内容・評価
- 授業実施時の対話 授業プロセスでのやりとり
そこで教師が何を受け取るか 感受性にかかってくる。
背景には、そこには教師がどのような理念を持つか、
どのような教育信条を持つか
- 学びについての感受性は教師の専門性の重要な側面

おまけ：授業活動での選択

- インターフェースとしての「感受性」は育成できるか
- 大きな目標と目の目標をともに意識すること
- その目標を常に問い直すこと
- アウトカムの評価をしていくこと

- 学習者の学びと教師の構えとの対話